
空から舞い降りるもの。

保科 郁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空から舞い降りるもの。

【Nコード】

N1871D

【作者名】

保科 郁

【あらすじ】

クリスマス前に彼氏に振られてしまった六花^{りっか}。クリスマスモード漂う街中を、苛立ちながら歩いていた彼女は不思議な雰囲気を持つ男と出会った――。

寒空の下で

「クリスマスなんて消え去ってしまえッ!!」

煌^きびやかなイルミネーションに彩られた街中で、一人の女性が口汚く罵り声をあげ、鼻息も荒く歩いていった。

女性——六花^{りつか}は クリスマス前のこの時期に、彼氏に振られたのだ。一方的に。

「なにが仕事が忙しいから……、よ。なにが、お前に心苦しいから……、よ!!」

街中は人で溢れかえっているけれど、六花は周りを気にすることなく声を荒げている。

その周囲の人達は クリスマスイブのおかげで恋人同士が多いのだが、それが更に六花の神経を逆撫でしているのだ。

「……ほんと…最悪なクリスマス……」

荒々しい言葉とは裏腹に、六花の声音は今にも消え入りそうなくらい弱々しくなっていた。目元には涙が滲^{こぼ}み、今にも零^{こぼ}れ落ちそうだ。

六花は涙が零れないよう数回 瞬^{まばた}きすると、気持ちの高ぶりを抑えるように 強く目をつぶった。

街中は緩やかなクリスマスソングが流れ、賑やかで楽しげな人々の騒めきが辺りに満ちている。

けれど、誰一人として六花を気に掛ける人はいない。

六花には逆に、そのことが心地よく感じられた。

しばらくして、ようやく気持ちが落ち着かせた六花は、軽く息をつくとゆっくりと^{まがた}瞼を開き——思わず息を呑んだ。

視界の端で、見慣れた男の、彼の顔が見えたような気がしたのだ。

「ま…待って！」

一瞬、強^{こわ}ばったものの、体はすぐその方向に走りだした。かなり込み入っている雑踏を、なんとか擦り抜けていく。男は目的があるのか無いのか、六花の前を、ふらふらと彷徨^{さまよ}っていた。

「ちょっと、待っててば——！」

六花は声を荒げると、ようやく追い付いた男の腕を握り締めた。それでようやく気付いたのか、男は足を止め、後ろ——六花の方を振り向いた。

とたん、その男の目が大きく見開かれ六花を凝視する。けれど相対する六花の目も、同じくらい見開かれていた。

「そう…そうよ、ね。あいつがこんな所に居るはずないわよね……」

力なくうなだれ、男の——彼とは違っていた。その人の腕から六花はゆっくり手を離した。

男は怒るでもなく、その場に佇んでいる。

「ごめんなさい…人違い、でした」

少しの落胆とともに六花は頭を下げたが、男が無表情のまま自分を見つめているのに不安になった。

「お、怒ってます…？」

窺^{うかが}うように聞いてきた六花に、男は ゆっくりと首を振り 微笑みを返してきた。

ほっ…と胸を撫で下ろした六花は、ようやく男の顔をしっかりと見ることができた。男は六花の彼氏とは違ったが、何となく似たようなところがあった。

涼しげな目元や眉の角度がそうだ。

そのせいか六花には、男と会ったことがあるような……何だか懐かしいような気持ちを感じていた。

可笑（おか）しな男

そんな事を考えていた六花は、ふと 男が未だに自分を見ていることに気付いた。

「あ、じゃあ私はこれで。ほんと すいませんでした」

もう一度 軽く頭を下げると、六花は少し焦りながらその場を後にした。けれど、数歩もいかずその歩みを止める。

「あの…何か…？」

六花の数歩後ろには、さっきの男がぴったりとくっついてきていた。怪訝そうにしている六花に、男は にこにこ楽しげに微笑んでいるだけだ。

「何か用ですか…？」

もう一度尋ねても、男は不思議そうに首を傾げるだけだ。

（…もしかして……変な人なのだろうか）

六花の胸に不安が過る。用事もあるし、このまま無視して行ってしまった方がいいのか…、そう悩んでいる六花の手を、男はぎゅっと握り締めてきた。

「や…ッ!! 何す……」

思わず手を振りほどき 抗議しようとした六花の目に、今にも泣きだしそうな、捨てられた子犬のような顔をした 男が目に入る。それがあまりにも心細げだったせいで、六花は言葉を続けることができなくなってしまった。

「な…何もそんな顔しなくても……」

自分が悪いわけではないのに、何だか苛めているような気分になっってしまう。

男は心細げな顔をしたまま、六花の手を見つめていた。その物言いたげな瞳に六花は根負けした。

「あゝ、もう！ 私が悪かったわよ、ほら!!」

六花がそう言い手を差し出したとたん、男は ぱつと顔を綻ほころばせ両手で握り締めてきた。

その様子は邪気がまったく無く、子犬が飼い主にかまってもらえて、嬉しくてたまらない…というような感じだ。

こぼれんばかりの笑顔を浮かべている彼の背後には、振り千切れんばかりに振りまくっている尻尾まで見える気がする。

これは、今日 用事を済ますのは難しいかもしれない…と、六花は深いため息をついた。この男をどうにかしなければ、移動するの
もままならないだろう。

六花はとりあえず、近くにある公園まで男を引きつれて行った。
このまま立ち尽くしているのも変だと思ったのだ。

男は抵抗するでも口出しするでもなく、ただ にこにこと六花に付き従っていた。

公園は、微かに街中の喧騒が流れてくるだけで、しん…と静まり返っていた。それもその筈、こんな寂れた——ベンチと砂場、ジャングルジム位しかない公園に誰が足を運ぶというのだろう。

時折 公園を通り抜ける人影はあるものの、やはり寒いのが皆足早に過ぎていった。

「えーと、それで…あんたは一体何なわけ？」

六花はとりあえず 公園に備え付けてあるベンチに腰掛け、男に問い掛けた。もはや敬語ではなく、砕け切った話し方だ。

というのも この、未だに六花の手を握り締め 満面の笑みを浮かべている男に、敬語を使うのも馬鹿らしくなったからだ。

六花の質問に、男は首を傾げただけで何も答えてはこなかった。

“なまえ”

「……っ、あんたさあ……………て、そういえば名前なんていうの？」

何も言ってこない男に苛立った六花は、尚も問い質そうとしたが、ふと 名前も知らないことに気付き質問を変更した。

「な…まえ？」

もしかしたら喋れないのだろうか…と不安になっていた六花は、小声ながらも男が返事をしたのに、ほっと息をついた。どうやら言葉は理解できるらしい。

「そう、なんていうの？ あ、私は六花っていうんだ」

返事をしてくれたことが何だか嬉しくて、六花は つい自分の本名も出してしまった。

一瞬 自分のうかつさにはがみしたものの、まあ名前だけで何ができるわけでもなし…と気を取り直す。

「…………り、つか？」

男はぼそぼそと六花の名を小声で何度も呟いた後、小首を傾げながら六花を見て聞いてきた。

なんだか小動物のような可愛いらしさがある。そんな事を考えてしまった自分を無かったことにするかのようになり、六花はぶっきらぼうに答えた。

「そうよ。…で、あんたは？」

「なまえ…ない」

でも男が答えた事は、六花の想像外のもので…

「だから、六花がつけて？」

続いて言われた言葉も、すぐには理解できないものだった。

「…は！？ 何言ってるの？」

名前が無いなんてそんな事あるはずもないし、初対面である六花につけてくれというのも変な話だろう。

もしかなくともからかわれているのだろうか…、そんな思いと共に疑いの眼差しを向けてみたが、男は平然と六花を見返してきた。

相変わらずの にこにこ笑顔ではあるが、嘘や冗談を言っているようには見えなかった。

男はわくわくと、期待に満ちた眼を向けてくる。

さつきも思ったが、自分は何故だかこの男の眼差しに弱いようだ…六花はそう考え軽いため息をつく、は名前を考えるべく 男をじっくり観察した。

(……やっぱり似てる……)

思い出すのにまだ痛みを伴う彼の、哲也^{てつや}の顔が浮かんでは消える。

そんな六花の頭に、哲也と冗談混じりに話していた、その時の会話が浮かんだ。

六花は無意識に呟いていた。

「…雪也^{ゆきや}……」

何故その名前を出したのかは分からない。ただ何となく、彼にはそれがふさわしい気がしたのだ。

見た目の印象も、儚^{はかな}げな彼に合っている気がする。

小さな呟きだったから聞こえなかったのか、男が確認するように六花を覗いてきた。その仕草がなんだか子供のようで、六花は知らず口元を緩^{ゆる}めていた。

「そう…、あんたの名前は雪也よ」

笑顔で男を見つめ、はっきりと告げる。次の瞬間、男——雪也はこれ以上の幸せはない…とでも言いたげに、顔を破顔させた。

その表情がとても華やかで、とても嬉しそうで、六花は我知らず見入ってしまった。

雪也の真意

「ありがとう、六花！！」

「な…っ！　ちょ、ちよっと！！」

雪也は嬉しそうに、思いっきり抱きついてきた。六花は戸惑い引き剥がそうとしたが、思いの外　雪也の力は強く離れることができない。

これ以上もがいても無駄だと覚った六花は、ひとつため息をついておとなしくなった。

気持ちが悪いとか嫌な感じとかは不思議とないのだが、何故だか気恥ずかしく　六花は顔を見ないようにそっぽを向いた。

雪也はそれを気にするでもなく、嬉しそうに笑いながら六花にくっついてる。

冷たい風が吹き荒^{すさ}ぶ中、二人は静かに寄り添っていた。誰かが見れば恋人同士に見えたかもしれないそれは、幸か不幸か、誰の目にも入る事はなかった。

「それで…、雪也は何なの？」

しばらくは雪也の好きにさせていたが、これでは埒があかない、と六花は再度　問い掛けた。

もちろん身体はなんとか引き離させた。雪也は最初は離さなかったが、六花が本気で怒りそうになったせいで渋々腕を外した。

雪也は質問の意味が分からないのか無言で首を傾げている。

「ええつと…、何で私についてきたの？」

具体的に聞いてきた六花に、雪也は数秒考えるように視線をずらすと、再びにつこり目を合わせて言ってきた。

「六花を探してたから」

「え？」

一瞬、自分は雪也と知り合いだったのだろうか……と六花は焦ったが、絶対 彼とは初対面だ、と思い直す。

哲也とどことなく似ているのだから、会っているなら印象に残っているはずなのだ。

「探すって何で？ 私ら今日、初めて会った……よね？」

その言葉に雪也は悲しそうに顔を歪めると、六花の手を握り締め、そっと呟いた。

「初めてじゃ、ないよ。ずっと そばにいた…」

そのあまりにも哀しげな様子に六花は息を呑み、握られた手を振り払うことも 怒ることも忘れてしまった。

確かに六花は 雪也と会った時から懐かしい気がしていたし、初

めて会った感じもしなかった。けれど記憶には本当にはないのだ。

もしかして記憶喪失にでもなってしまったのだろうか…と六花は少し不安になったが、雪也が言葉を続けたので、その思考をとりあえず中断した。

「六花を探してたのは…六花を止めるため、だよ」

「……ッ!!」

その言葉に、六花の身体は大きく震えた。雪也は哀しげな瞳で静かに六花を見つめている。

それは六花がこれから何をするのか、しようとしているのかを理^わ解^かっている瞳だった。

六花の目は大きく見開かれ、胸のうちは混乱と驚愕でうずまいていた。背筋に冷たい汗が流れる。

「な……何で…ッ?」

目の前の雪也——見知らぬ男を恐れと混乱の入り交じった瞳で凝視した六花の身体は、小刻みに震えだしていた。

誰にも話してはいない、誰も知るはずのない事を知りえている男に、恐怖を感じて。

哲也との別れ

六花を落ち着かせるように、雪也は一度力を込めて六花の手を握り、静かに離れた。瞳は哀しげな色^{たた}を湛えたままだ。

「おねがいだから、そんなことしないで…。いなく、なら ないで……」

雪也は声を震わせながら、辛そうに言葉を絞りだすと、目からぼろ　と雫を落とした。

その、自分を思っ言ってくれている様子に、六花の身体の震えはいつしか止まっていた。

雪也は　ぼろぼろと涙を零し続けている。

六花にはそれが、自分の代わりに泣いてくれているような気がして、彼のことをとても愛しく感じた。

無意識に手を延ばし、彼を包み込むように抱き締める。

六花は雪也を抱き締め、いつしか自分も涙を零していた。

六花は今から彼氏の元に行く所だったのだ。

自分を捨てた男、哲也に…

復讐を、する為に……。

六花の彼、哲也は十一月頃からずっと「最近とても忙しいんだ…」と嘆いていた。

クリスマスの予定も仕事が忙しいから　と、六花の誘いを断り、電話もあまりこなくなっていた。

六花はそれに少し不安になりながらも、本当に仕事が忙しいのだから…と、極力考えないようにしていた。

でも、不安は的中した。

哲也は別れ話を切り出してきたのだ。

仕事が忙しくて、なかなか会えないのが心苦しいから…、お前に悪いから別れよう…と。

もちろん六花は嫌がった。

気にならないといえば嘘になるが、彼のためなら我慢できたのだ。

でも、哲也は聞き入れなかった。聞き入れてくれなかった。

お前はお前を幸せにしてくれる人を見つけてくれ…と、去っていったのだ。

彼が去っていった後を呆然と見ていた六花は、気付くと自分の部屋に座り込んでいた。

しんと静まり返った部屋で、六花はやっと彼が自分の前から居なくなってしまった事を実感した。

冷えきった身体を抱き締め、一人六花は泣いた。

彼が去ってしまったことが居なくなってしまったことが、悲しくて辛くて仕方なかった。

誰にも会いたくなくて家に引きこもった。

学校に出てこない六花を心配して、親友の優香が毎日電話をしてきてくれた。でも、どうしても出る気がおきずそのまま放置した。

六花は泣いて泣いて数日を過ごした。

吐き気がおきて食欲も湧かず、胸が苦しくて仕方なかった。泣きすぎたせいか、身体が熱っぽく、だるくて何もする気が起きなかった。

涙は枯れることを知らないかのように、次から次へと溢れだして

きた。

どこからこんなに涙が出てくるのだろうか？

不思議だった。

でも、それが何だかおかしくて、六花は思わず、くす　と笑ってしまった。それで気が緩んだのか、何だか無性にお腹が空いてきた。

くす　くすくす

六花は数日ぶりに笑った。

彼に振られ、もう死んでしまいたい…と思っても、自分の身体はお腹も空くし、普通に生きようとするのだ。

それが何だか滑稽で、でも　だからこそ愛しく思えた。

ようやく落ち着いた六花は、彼を待とう…と思った。

仕事が落ち着くまで、再び彼が迎えに来てくれるまで。

振られても　彼のことが好きな気持ちは変わらなかったのだ。

そこまで考え　気が楽になった六花は、このまま過ごしてはいけな**い**と思った。

今まで休んでいた大学に向かうことにした。

休んでいた分を取り戻さなくてはいけない。気分が落ち着いたせいか久しぶりに笑ったせいか、前向きに考えることができた。

六花は手早く身仕度を整えると、大学に向かった。

久しぶりの大学はいつもと変わらず賑やかだった。

そういえば、友達にもこの所ずっと会っていない…。

そこまで考えた六花は、親友の優香が心配して何度も電話を掛けてきてくれていた事を思い出した。六花は、優香に謝ろうと彼女を探すことにした。

電話でもいいのだが、せっかく大学に出てきたのだから直接謝りたかったのだ。

数人の知人に優香の居場所を尋ねると、皆 六花の心配をしてきた。

何日も姿を見せない六花のことを、気に掛けていたようだ。

六花はその事をとて嬉しく思った。

ほどなくして、食堂で目当ての優香を見つけた。優香はこちらに背を向け、隣に座っている友人と何やら熱心に話しているようだった。

気持ちを落ち着けるため、六花は一つ深呼吸をすると、優香の元へ向かった。

空から

優香は興奮して何かをまくしたてていた。あまりの剣幕に、声を掛けていいものか…と迷っていた六花は、次の瞬間凍り付いた。

「——だからあゝ、あいつ元々 別な子狙いだっただって。いわゆる暇つぶし？」

「なにそれ、あいつ最低！！ 六花とは遊びだったわけ！？」

吐き捨てるように言った 優香の言葉を聞いた六花は、顔から血の気が引き足元の感覚がなくなった。

腕から鞆が滑り落ち、ゴッ…と鈍い音が辺りに響く。

「り…六花！？」

まさか本人がいるとは思っていなかったのだろう、優香は驚きに引きつった声をあげた。

けれど、六花にそれを理解する余裕は無かった。

痛い…！

お腹が…、お腹が痛い！！

その張り裂けそうな痛みと 何かが抜け落ちていく感覚に、六花は立っていられず その場に蹲る。

足元に ぬるり…とした感覚があり、床を見ると 目にも鮮やかな朱が一筋流れていく。

優香が慌ててこちらに近づいてくる気配がしたけれど、あまりの痛みに 六花の意識はそこで途絶えてしまった……。

そして……次に気付いた時に六花は、街中でぼんやり佇んでいた。

六花は自分がどうなってしまったのか、なんとなく分かった。

六花は、哲也に体よく遊ばれたのだ。本気で愛し合っていると思っていたのは……自分だけだったのだ…。

六花の頬には、とめどなく涙が零れ落ちていた。

まるで胸が引き裂かれたように痛かった。痛くて痛くて、いつそのこと死んでしまいたかった。

その苦しさから逃れるように、六花は哲也を憎んだ。
愛しい彼……。だが愛しいがゆえに、憎しみは強かった。

六花は思った。

彼を殺そう…と。

彼を殺して……そして自分も死のう、と。

辺りはすっかり、宵闇に包まれていた。

頬にはもう、涙は流れてはいなかったが、二人はまだ抱き合ったままだった。

「…六花」

雪也が六花の背中をそつ…と抱き締め、優しく囁いた。

六花にはもう、彼が…雪也が誰なのか気付いていた。胸に愛おしさが溢れてくる。

六花の瞳から、また雫が零れ落ちた。

「…ごめん……ごめん、ね……！」

六花は雪也を強く抱き締め、謝り続けた。
ずっと気付いてあげられなくて、愛してあげられなくて、ごめん
…と。

雪也はその言葉にそつと微笑み、静かに返した。

「あやまらないで……
ぼくは六花の元にこれて、しあわせだったよ…」

その声は、嘘偽りなく本当に嬉しげな響きを宿していた。
でも六花には、その言葉が過去形であることが悲しくて悲しくて
仕方なかった。

雪也は静かに、幸せそうに……歌うように続けた。

「名前もつけてもらえたし、こうやって抱き締めてもらえたし…。
このまま、消えていくだけだと思っていたのに……」

だから大丈夫だよ、とでも言うように雪也はにつこり微笑んだ。

六花はその顔をすっかり覚えておきたいのに、涙で目の前が歪み、
思うように見ることができなかった。

どこからこんなに水分が出てくるのか。六花の涙はとどまる様子
もなく、零れ落ちていく。

六花の中の……悲しみや辛さと一緒に。

「もう…だいじょうぶ……だよね？」

雪也は静かに身体を離すと、六花を覗き込んできた。そして笑顔で続ける。

「だって…元々、する気なかった…でしょ」

六花は驚いた。自分でも気付いていなかった事を言い当てられたのだから。

そう…哲也を殺したいと思っていても、実際 六花は彼を殺せなかっただろう。

本当はただ、その憎しみを口実に、一目だけでも逢いたい……と思っていたのだ。

………自分が、消えてしまう前に。

「………うん」

六花は微笑んで頷いた。

でも、憎しみに…悲しみに取りつかれたままだったら、そのことに気付かなかったかもしれない。

気付かないまま、自分はその行為を犯してしまったかもしれない。

彼が、雪也が止めてくれなかったなら。

「ありがとう…ね」

六花はここ最近、ずっと浮かべていなかった、花が咲き誇るよう

な笑顔を雪也に向けた。

雪也はその顔を幸せそうに見つめると、おもむろに立ち上がった。そして、六花にこれ以上はない程の笑顔を向け、

「じゃあ、またね。

……おかあさん」

そう静かに言うと、ゆつくりと空中に浮き、薄らとした光を放ちながら溶けるように消えていった。

それを涙を流しながら……でも、笑顔で見送った六花は、自らも空気に溶けるように消えていった……。

「……っか！ りっか！！」

目を覚ますと、目の前に涙を湛えた母の顔があった。ぼんやりする頭で周囲を見渡すと、隣には心配そうに自分を覗き込んでいる父もいる。

「よっ……よかった！！ 目が覚めたのね！！」

「おい、あまり心配させるな……」

涙声の母と、少し不安げな父の声が聞こえてくる。

少し離れたところで、いつもは生意気な弟が心配そうにこちらをうかがっていて、隣では優香が涙を流しながら、ごめん…ごめん…と謝っている。

ああ…、私はこんなにも皆に心配させてしまったのか。

申し訳なく思ったが、皆の気持ちがそれ以上に嬉しくて、六花の頬が微かに緩んだ。

大丈夫…私は、大丈夫。

本当はまだ、全然大丈夫なんかじゃないけれど、胸と…お腹が痛むのだけど、皆が心配してくれるのだから私は やっていける。

ねえ…そうでしょ？

六花は痛みが残る、もう、そこには居ない我が子を思ってお腹をゆっくり撫でた。

窓の外では、今年初めての雪が はらはら と舞い降りていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1871d/>

空から舞い降りるもの。

2010年10月28日08時19分発行